

オリ・パラかわらばん

かがわけんきょういくいんかい
香川県教育委員会

No.12

2022年
3月発行

願いは叶い、夢は続く

東京2020オリンピック ライフル射撃 日本代表 香川県警察 堀水 宏次郎



経歴

香川県善通寺市出身。2000年に高校を卒業後、香川県警の警察官になり射撃を始める。
2010年 広州アジア大会出場 エアピストル団体・50mピストル団体(銅メダル)、50mピストル個人6位
2014年 仁川アジア大会出場 エアピストル団体6位、50mピストル団体6位
2021年 東京2020オリンピック出場 10mエアピストル個人16位、混合10mエアピストル20位

高校を卒業後、警察官になった私は、警察学校で射撃を初めて経験しました。警察官になれば必ず行う拳銃の訓練です。最初は銃を撃った時の大きな音に戸惑いましたが、射撃が自分の性格に合っている印象をすぐに受けました。警察学校卒業後、県警察の拳銃特別訓練生に指定されたことから本格的な競技に取り組み、ナショナルチームの人たちと同じ試合に出場する機会も廻ってきました。その時見た、10点を撃ち続けるオリンピックの技術の高さに衝撃を受けた私は、「自分もこんなオリンピック選手になる!」と決意しました。

オリンピックを目指して

目標がオリンピックになると、射撃がもっと楽しくなりました。練習をすればするほど上達し、試合では自己ベストを次々と更新していきました。大会はとても緊張しますが、成果を出せたときの達成感は何物にも代えられません。その頃から心掛けていたことの一つに、「射撃ノート」があります。これは、良かった撃ち方を自分の言葉で書き残し、調子の上がないときなどに読み返すためのものです。そこには、当てるためのヒントがたくさん書かれていますので、読み終えたときには「よし、やれる」と自信が持てました。練習の他では、インターネットで配信されるワールドカップの様子を何度もチェックしていました。「もうすぐ、自分もこの舞台に立つんだ」とワクワクしながら、世界で戦うトップ選手の撃ち方や使っている用具などを観察することが習慣でした。初めての国際大会の出場は世界選手権で、オリンピックを目指すようになって約3年後のことでした。憧れの選手を間近で見て、感激したのをよく覚えています。その後も、国際大会を経験していく中で、ワールドカップの入賞や、アジア大会でメダルを獲得するなど、世界で戦える実力を着実に付けていきました。そして、たくさんの方々の協力もあり、東京2020オリンピック競技大会に出場が決まりました。



日々の練習を綴った射撃ノート

東京オリンピックを振り返って

オリンピックが決まって、一番うれしかったことは、周囲の人たちが自分のこのように喜んでくれたことです。ずっと夢見ていたオリンピックは自分だけのものではなく、みんなの夢でもあったことに気づき、「射撃を続けてきて本当に良かった」と思いました。そして、多くの方のサポートを受け万全な状態で競技に臨むことができました。オリンピック本番は苦しい場面もありましたが、最後まで自分の射撃ができたので良い試合だったと思います。国内・外での経験をオリンピックで生かされたことは、これまで以上に最高の経験となりました。



練習風景:2016年アジアオリンピック予選



競技風景:2017年ワールドカップ

今後の夢

オリンピックはとても感動的です。これからオリンピックを目指そうとする方に、ぜひこの喜びを味わってもらいたいと思います。私がたくさんの人から支えてもらえたように、次は自分も選手の力になっていきたい。そう考えるようになり、「オリンピック選手を育てる!」私は今、そんな夢を見ようとしています。

みんなちがって みんないい

東京2020パラリンピック 車いすフェンシング日本代表

あべ ちさと
阿部 知里



経歴

香川県高松市出身。2012年頃より病気のため車いす生活に、2015年からフェンシングを始める。
2017年~2020年ワールドカップ(ワルシャワ・UAE・アムステルダム・ハンガリー・京都)、世界選手権大会(韓国)出場
2018年 アジアパラ競技大会(インドネシア ジャカルタ) サーブル(銅メダル)
2021年 東京2020パラリンピック出場 サーブル10位、フルーレ14位

私は、10年位前から病気で少しずつ足が動きづらくなり、手術も何度もしましたが、今は車いすを使った生活を送っています。そして、車いすを使うようになってから突然「障がい者」と呼ばれるようになりました。目が悪い人がメガネをかけているのと、足が悪い人が車いすを使っているのと何が違うのだろう。メガネをかけていても、みんなにも気にとめないのに…。当時、車いすを使うようになったばかりのころは、この先の人生をどうやって生きていったらいいのかわかりませんでした。日常生活のすべてのことが、今までのようにスムーズにできなくて、行きたいところにも行けなくて、やりたいこともできなくて、本当に苦しかった…。周りからは「前を向いて頑張って」って言われるけれど、どっちが前でどっちが後ろなのかも分からなくて。将来の夢や希望が一気に崩れ落ちてしまって、生きているのが苦しい、そんな心境でした。



選手村にあるパラのシンボルマーク

フェンシングとの出会い

車いすの中で、自由がなくなったように感じていた私は、その不自由さから少しでも解放されたい、自由に動きたいとの思いから、いくつかのparasportsを体験し、その中の一つにフェンシングがありました。そこで、バルセロナオリンピックとアトランタオリンピックに出場経験のある市ヶ谷廣輝先生に出逢ったことで、私のアスリートとしての新しい人生が始まりました。「目標をどこに置かずか頑張りが変わってくる。どうせやるならパラリンピックを目指してみよう!」と言われました。そして、障がいとか車いすとか、なにも気にせず対等に関わり、普通に接してくれるフェンシング仲間がいたことも、大きな支えとなりました。歩けなくなって心が苦しかった時に見放さずに支え続けてくれたリハビリの先生、パラリンピックを目指すきっかけを与えてくれた先生、フェンシングの楽しさや、また楽しく笑うことを教えてくれた仲間たち。車いすになってから、たくさん心配をかけてきた人たちに「パラリンピックに出場することで恩返しをしたい」との思いで、目標に向かって全力を尽くしてきました。パラリンピックへの出場が決まって、みんなが喜んでくれたときは本当にうれしかったです。

東京パラリンピックに出場して

2021年8月、東京2020パラリンピックに出場してきました。「今までの想いをすべて出し切り、全力を尽くすこと」を目標に出場した2種目。サーブル10位・フルーレ14位という結果でした。東京2020パラリンピックの選手村や競技会場では、国籍も性別も年齢も、車いすでも義足でも、目が見えても見えなくても、手足があってもなくても、なにも関係ないし、なにも気になりませんでした。その人と、人として関わり、話をするから、お互いになにも気にならない。人として尊重されることに、とても心地よさを感じました。身体の色や形がどうであろうと、そこにはたくさんのメダリストたちがいました。何個ものメダルをかけている人もいます。「Congratulations!!」互いに知っている人も知らない人も、みんなが声をかけ合い、喜び合い、たたえ合います。みんなが笑顔で輝いています。多様性があり、その人自身を認め合う、とても素晴らしい世界でした。

*Congratulations:おめでとう

みんなちがって みんないい

国際パラリンピック委員会(IPC)は提唱しています。『Impossible』そこに少し工夫をすると『I'm possible』に変わります。この「I」のように、少しの工夫や理解や配慮が大きな変化になるのです。

「みんなちがって みんないい」
今大会をきっかけに、どんな人も生きづらさを感じずに もっと自分らしく生きられるような、そんな世の中になったらいいなと思っています

*Impossible:不可能・できない *I'm possible:可能・私はできる



イタリア選手[金メダリスト]との対戦 左が阿部選手